

学術用語としての「靈魂」を考える

—「たましひ」は「ひ」と「たま」が堅く締(し)まったもの

靈魂について考える前に、靈魂に類似した言葉が少なからず存在することを思い起こしておきたいと思います。靈、魂、靈性、心霊、心魂、心性、心理、精神、精霊などです。人文系の学問、たとえば哲学や宗教学において、それらの用語が厳密に区別されておらず、論者によって使い方がまちまちであることが、それらの学問の進展や深化に好ましからざる影響を与えているように思います。靈魂関連の用語について厳密な意味での使用を初めから諦めている研究者もいるのですが、ここでは敢えてそれらの用語に関する整理を試みてみたいと思います。

まず、どのような人間観に立脚してこの問題に取り組むかということを確認しておく必要があります。人間の存在構造の観点から人間観を捉えると、一元論、二元論、三元論に大別できます。一元論は唯心論(観念論)や唯物論(実在論)が典型的であり、二元論は心身二元論(相互作用論、並行論、随伴現象論)などが知られています。一元論は極端な学説のため、考察から外しておきますが、真理が一つだとすれば、最終的には再浮上する可能性も秘めているものです。心身二元論は、人間は心と身(体)から成るとするもので、経験的な実感とも合致しており、たぶん最も一般に普及している人間観です。それらに対して、小生が立脚している人間観は、三元論です。これは人性三分説(trichotomy)とも呼ばれ、人間は靈魂体(靈魂魄)、あるいは靈心身(spirit-mind-body[flesh], esprit-âme-corps[chair], Geist-Seele-Leib[Fleisch], spiritus-anima-corp[us] [caro], pneuma-psyche-soma[sarks], ruah-nephesch-guph, atman-manas-śarira)という三重の存在構造を持つとする見方です。古今東西を問わず、宗教の奥義に関わる教説や神秘主義的思想に普遍的に見られる人間観です。心身二元論は、常識的な人間観に違いありませんが、その致命的な欠点は、心的様態を一括して「心」とするために、心が内蔵する次元や分節を洞察できないことにあります。従って、心身関係を支える根拠や心身全体が超越する方位が見えず、理論的にも実践的にも、心身内に自我は留まらざるをえません。たとえば、大乘仏教では「心真如、心生滅」(大乘起信論)といい、心は真如のレベルと生滅のレベルに二分されるのですが、心身二元論では単に「心」と一括するために、その区別が掻き消されて曖昧模糊とならざるをえません。

ところで、三元論では、心と身(体)の他に、靈が実在するとします。靈とは心身の存在根拠、心身の価値(尊厳)の源泉です。靈と心、あるいは靈と魂、この両者の混同ないしは両者の区別の消滅が、余計な混乱と数多の誤解を招いて来ました。因みに、心と魂は、ほぼ同義と見てよいでしょう。漢字の「魂」はギリシア語 psyche に相当するもので、植物や動物や人間など生き物は、全て魂(psyche)を持ち、植物魂、動物魂、人間魂と呼ばれています。ただ、和語の「たましひ」に漢字の「魂」を当てたことは、大きな誤訳でした。三元論でいう靈魂体(靈心身)は、おおよそ和語では順に「ひ」「たま(こころ)」「からだ(み)」に相当するでし

よう。本田親徳（幕末から明治初期に活躍した神道家）の唱えた一霊四魂説に従えば、一つの霊（直霊）が四つの魂、即ち荒魂、和魂、幸魂、奇魂に分かれて働いています。その四魂は、それぞれ順に勇気、親和、愛情、智慧の働きを分担しており、直霊はそれらを顧みて（省みて）統括するものです。「ひ」は「なおひ」の他にも、「むすひ」「ひと」「ひこ」「ひめ」など複合語として残っていますが、「ひ」には漢字の「霊」や「日」が当てられています。

本田説によれば、「たましひ」とは、「ひ」と「たま」が堅く締（し）まったものであり、靈魂体の中の「靈魂」に相当するものと言えます。「たましひ」(spirit-soul と英訳すべきですが、通常は soul が当てられます)は、靈魂体の上位二項（霊と魂）を包括した用語ですから、正に「靈魂」に違いありません。「たましひ」に漢字の「魂」を当てたことで、上位一項（霊）が切り捨てられる結果となったのです。つまり、三元論が二元論に収縮したわけです。その代償は、計り知れぬほど甚大でした。不生不滅の实在が消えて、生滅する（生じては滅する）現象のみ残ったからです。このことは、人間観が矮小化されて、認識上の視野狭窄が生じたことを意味します。靈魂体の三元論が、頭部・胸部・腹部を具備した全き人体像だとすれば、心身（魂体）二元論は、首（頭）なき人体像に等しいものです。実に奇妙な人体像です。しかも、それが常識的な人間観として世間に流布しているのですから厄介です。ホリスティック(holistic)とは、この霊が本来の地位に復権した全き人間、つまり「全人」であることに他なりません。ギリシア語ホロス(holos)には、全体(whole)、神聖(holy)、健康(health)、治癒(healing)という、少なくとも四つの意味が重なり合っており、その意味の中核をなすのは、たぶん「神聖」ではないかと推察されます。

なお、「心」は「魂」とほぼ同義と言いましたが、「魂」が「霊」をも含むほどに意味が拡張された用例があるのと同様に、「心」にも「心真如、心生滅」のように、その意味が「魂」に止まらずに、「霊」（本心、本つ心）をも指す場合があるので、注意を要します。しかし、このことは、「霊」が幽霊や亡霊のように、土俗的で怪奇な心象を帯びることもあることを想えば、さほど驚くべきことでもないかもしれません。

「霊」と「魂」、また「靈魂」は、以上のように解することができます。では、靈魂関連の他の用語はどうでしょうか。「靈性」(spirituality)とは、「霊であること」(to be spiritual)を意味する抽象名詞です。「心霊」も、「靈性」とほぼ同義と思われますが、心霊写真、心霊現象などの用法から見て、抽象的な「靈性」よりも、多少なりとも具体的で超常的な現象を指す傾向が強いでしょう。不可視的な「靈性」に対して、可視的な「心霊」と言えるでしょうか。「心魂」は、もともと同義的であった「心」と「魂」が合わさったもので、「魂」が実体を指し、「心」がその働きを指す意味合いが強く、「心魂」で実体と作用の双方を含むものと見なすことができます。また、「心性」(mentality)が、人間や民族の特殊性を帯びた心の様態、有り様を意味するのに対して、「心理」は、よりいっそう普遍的な用語として意識状態や心的過程を

指す傾向が強いように思われます。

また、「精神」は、人性三分説でいう「霊」と「魂」のいずれをも指す用法を持つ、意味の揺れ幅が大きい用語ゆえに、十分な注意が必要です。ヘーゲルの『精神現象学』の原題は、**Phänomenologie des Geistes** です。Geist が「精神」と訳されており、三分説でいう「霊」を指します。ところが、医療関係者が使う用語としての「精神分裂病」「精神疾患」「精神科」などの「精神」は、**mental** や **psychic** のことですから、三分説の「魂（心）」レベルに相当するものです。「精神」は、「霊」と「魂」のいずれをも指すのみならず、霊と魂を総括した「靈魂」（和語「たましひ」に同じ）の意味でも使われます。たとえば、「身体」（**physical**）に対する「精神」のように。こうした訳ですから、「精神」という用語は、予め明確に規定した上でない限り、使うべきではないでしょう。漢字の「精」は五穀の精美なるものから、全ての純粹・清明なるものに用いられ、「神」は万物を引き出すものとしての天神や一般に意識や心を指しました。漢字の熟語「精神」は、「精巧・精緻など、すべてことの精微に入る」ことをいうので、元は靈魂的な実体を指す言葉ではなかったようです。内丹術では、「精」と「神」の間に両者を媒介する「氣」を想定しています。「精霊」は、山川草木など自然に宿る魂や死者の靈魂のことで、使用法が限定されています。

実は、最初に言及すべきでしたが、和語と漢字の対応の是非が常に問題となることにも注意を払う必要があります。ここでは詳細な考察は控えますが、和語の「ひ」「たま」「こころ」「からだ」「み」などが、漢字の「霊」「魂」「魄」「心」「体」「身」などと、どの程度まで正確に対応しているのか否かを、厳密に吟味・検討する作業が、本来ならば必要となるはずです。

最後に、上述したような用語の混乱が、身体観に深刻な混乱と誤解を与えたことを指摘しておかねばなりません。靈魂体（霊心身）の三分説では、「体（身）」は、いわゆる物質的身体だけではなく、「魂（心）」や「霊」にも想定されています。つまり、微細身から粗大身に至るまでの重層的な身体観、存在構造を持つことになるわけです。ところが、心身二元論では、心は身体ではなく、身体も心ではありえません。心が身体を持つことはあっても、心としての身体、心的な身体を想定する視点が、最初から欠落しているのです。ここから、肉体の機能停止によって人間存在は終わるとする「肉体人間観」が蔓延することになります。死は生の終わりであっても、決して存在の終わりではないため、この錯誤にいかにして気づくかが、今後の人類の命運を握っているといっても過言ではありません。

(2020/06/30 棚次正和)